

ウルトラマンマックス

怪獣は何故現れるのか

第4稿

脚本／小中千昭

TelePlay by Chiaki J. Konaka

2005\09\29

登場人物

トウマ・カイト
コイシカワ・ミズキ
コバ・ケンジロウ
シヨーン・ホワイト
エリー
ヒジカタ・シゲル
ヨシナガ教授

佐橋健児（俳優／役名・万城寺純）
西郷保彦（俳優／役名・戸山一兵）
桜木弘子（女優／役名・江戸百合子）
螺良谷 肇（監督）
宇津見正晴（撮影）
光田和雄（チーフ助監督）
奈良丸秀夫（セカンド助監督）
横山巡査

上田耕生（怪獣評論家）……………西田良（ティガ5話登場）
人見 信（アナウンサー）
実況アナウンサー
ストリート・シンガー

現在の佐橋健児（SF作家）……………佐原健二
現在の西郷保彦（カフェ・マスター）…西条康彦

ゲロンガ（全高5m） ※バラゴンの胴体に新たにデザインした
ゲロンガ（50m） 頭部。名称は『アンバランス』の未使用
プロットから引用。

ウルトラマンマックス

○地中

漆黒の地中に響く巨獣の唸り。

N 「自然界のバランスが崩れ、それまで人間の想像の存在で
しかなかった怪獣が本当に現れ始めました」

やがて崩れ始める土塊。

N 「しかしでは：人間は、怪獣をどの様に想像してきたので
しょう……？」

巨獣の目に差し込む光。

工事中のトンネルが土塊の向こうに覗く。

N 「これから30分、あなたの目はあなたの体を離れ、この
不思議な時間に入り込むのです……」

□メンテナンス

○渋谷区富ヶ谷交差点／午後

トンネル工事中の道路上に交錯している歩道橋。

ストリート・シンガーがギターを掻き鳴らしながら

歌い上げている。

そこを小走りに抜けていく、私服のミズキとカイト。

カイト「そんなに急がなくていいでしょ？」

ミズキ「休暇はたった5時間しかないんだから！ さっ早く！」

カイト「ちよっ、待ってってば！ ミズキ隊員！」

○テレビ局スタジオ

放送局のスタジオに、討論会のセット。

着席しているのはヨシナガ教授、怪獣災害評論家、

初老のSF作家・佐橋、そしてアナウンサー。

アナウンサー「今やわが国が抱える最大の災害危機である怪獣災
害について、本日は多角的に討論を行います。」

先ずUDFの科学者、ヨシナガ教授に伺います。何故、
怪獣が次々出現していると思われますか」

○渋谷の街

大スクリーンに映写されているテレビ画面。

ヨシナガ「怪獣は特に日本で多く出現しています。これは、日本列島が特異なプレート構造になっている事に起因しているのではないかという観点から分析を——」

○富ヶ谷歩道橋上

声を張り上げ歌っていた若い男、工事現場に閃光が走るのを見て、延ばした声が情けなくなり……。激しく揺れだし、必死に欄干につかまる。工事現場が陥没し、怪獣が出現。

ストリート・シンガー「ひいひいひいっ」

○スタジオ

上田「(早口/口角沫ばし)そんな悠長な認識でいるとは驚きだ！ いいですか、怪獣災害は、日本の経済にも深刻な事態をもたらしているんです。そこんところ——」

アナウンサー「ああああの、上田さんにはまた後ほどお話を伺いますので。ええでは、SF作家の佐橋さんは、怪獣についてどうお考えになっていますか」

佐橋「——怪獣が何故現れるのか——。ずっと私はその事を考えていました」

「何言ってるんだ」と大仰に首を振る上田。

佐橋「怪獣が現れ始めたのはここ一年程ですが、我々日本人は怪獣をずっと以前から知っていた。いや、想像してきました——」

と、アナウンサーのインナーフォンにわめく声。

FDがアナウンサーの脇に来て紙を渡す。

アナウンサー「ええと——、ちょっとお待ちください……」

○レトロ・カフェ

まるで昭和にタイム・スリップした様なカフェ店内。
入ってくるミズキ、怪訝そうに続くカイト。

ミズキ、カウンターに座る。

ミズキ「素敵なお店でしょ。雑誌で見て、一度来てみたかったんだよね」

カイト「ふーん……」

ずっと前に立つマスター（未だ顔見せず）。

マスター「何にしましょう？」

ミズキ「そうだなあ、ケーキも食べたいなー」

カイト「（小声で／時計を見せ）あと45分で任務だからっ」

ミズキ「（むっ）判ってますよだ（と視線を上へ）」

カウンター脇に置かれたモノクロテレビが目に入る。

ミズキ「あっ、ヨシナガ教授」

カイト「えっ？ ほんとだ……」

しかし、何かスタジオは騒然としている。

○スタジオ

急に差し込まれた原稿に目を走らせ

アナウンサー「たった今入りました情報です。渋谷区の地下工事

現場から、怪獣が出現した模様です。近隣にお住まいの

方は速やかに避難して下さい」

画面切り替わり、怪獣の映像が映る。

佐橋、ヨシナガ、怪獣の映像を険しい目で見つめる。

□オープニング

○富ヶ谷

咆哮し、移動していくゲロンガ。

○レトロ・カフェ

白黒テレビに映る怪獣の映像を見つめるマスター。
カイト、DASHパッドで交信中。

PAD内エリー「両隊員共、すぐに復帰して下さい」

カイト「了解！」

ミズキ「マスター、御免なさい、また来ます」

マスター「あいつの角、一本折れてるでしょう」

行こうとしかけた二人、振り向く。

マスター「——（二人に振り向き微笑）あれ、私が折ったんです

よ。40年以上も前に」

怪訝そうに二人、マスターを見ていたが——

カイト「（ミズキに促し）じゃ、失礼します」

二人、走り出て行く。

マスター、怪獣を眩しそうに見つめている。

マスター「——随分でかくなつたな、ええ？」

○奥多摩溪谷

若き日の西郷、そして佐橋、弘子が川辺にやってきたところ。S「1964年」

西郷「先輩、ここが上流ですね」

佐橋「ああ（と見回し）」

弘子「わあ、綺麗な川。まるでピクニックに来たみたい」

佐橋「（苦笑）しょうがないな……」

佐橋、目を向こうにやる——と！

佐橋「一平！ あれを見ろ！」

佐橋が指さす方向に視線を向ける二人。

西郷「さっ、山椒ラウス！」

その視線の先には、竹竿の先につけられた、怪獣の顔の絵。

その傍らには、若い撮影スタッフがサイレント・アリの背後に並んでいた。監督の肇、メガホンで

肇 「はいカット。オッケー」

チーフ 「カットオッケーですーっ。次は合成用のカットです」

合成用ミッチェルを重そうに担ぎだすスタッフ。

監督の肇、台本を手に三人に近づく。台本の表紙には「UNBALANCE」というタイトル。

肇 「じゃあ、次は三人の背中から撮るから」

弘子 「あんな竹竿の絵じゃ、怖さが判んないな」

佐橋 「映画だって同じ様にやってるんだ。贅沢言うな」

弘子 「贅沢言ってるつもりはないんだけど」

西郷 「これ終わったら飯ですよね？」

肇 「うん、確かそうだな」

西郷 「けど、また握り飯なんだろうなあ。せめて梅干しでも入ってりゃマシなだけで……」

肇、すまなそうな表情を浮かべる。

佐橋 「(察し、話題を変え) 監督、このアンバランスっていうシリーズは、怪獣はあんまり出さないっていう方針だったと思うんですが」

肇 「うん、やっぱり怪獣を出してほしいっていう要求があったね。番組のタイトルも変わるかもしれない」

佐橋 「そうなんですか」

西郷 「うひゃ、テレビで毎週毎週怪獣が出てくるなんて、凄いや。映画だって年に一本とか二本だったのに」

弘子 「そんなに沢山怪獣が出てきたら、飽きられないの？」

肇 「いや、子どもは怪獣が沢山見たいんだと思う。子ども達はみんな、怪獣が大好きなんだ。これからは映画だけじゃなく、テレビでも、怪獣がスターになるよ」

佐橋 「(笑い) それじゃ人間の役者はお払い箱になっちゃう」

西郷 「今のうち、せいぜい顔売っとかないと」

撮影の宇津見、肇を呼ぶ。

宇津見 「監督うー、アングルちょっと見て下さい」

肇 「ああ今行く」

肇、カメラの設置された方へ。

チーフ助監督、セカンドに

チーフ 「次の現場に先乗りして、照明さんの機材運んでくれ」

セカンド「はい（走る）」
チーフ「監督、このカットが終わったら——」

西郷「さて、怪獣山椒ラウスを見て驚く背中の中の芝居だぜ」

西郷、弘子の背中に隠れるわざとらしい演技。

弘子「ちよっと、これじゃ逆でしょ？」

西郷「いやいや、強い人が弱い者をかばってくれなきゃ」

弘子「だから逆だって」

苦笑している佐橋——。

○スタジオ

現在の佐橋の顔——。

佐橋「——（呟き）ウシオニ……」

アナウンサー「この時間は予定を変更しまして、東京渋谷に出現

した怪獣についての報道特別番組をお送りしています。

現在避難命令が出ているのは、渋谷区、新宿区です」

佐橋、スタジオの隅で、DASHパッドで通信して

いるヨシナガを見る。

○DASHマザーコクピット

モニタに映るヨシナガの顔。

ヨシナガ「何故怪獣が渋谷から出現したか、調べてみるわ」

ヒジカタ「（頷き）怪獣は代々木公園に足止めをさせ、そこで決

着をつけます。コバ、シヨーン、怪獣の進路を変えろ」

コバ「シヨーン」（オフ／無線）了解」

○富ヶ谷

DASHバード2号、イオンブラスターで怪獣を撃つ。咆哮するゲロンガ。

○同／地上

中継クルーが怪獣を望むポイントに到着。

中継アナ「こちら渋谷の現場です！ DASHによる攻撃が始まりました」

と、その頭上に1号が低空で飛来。

ミズキ「(オフ/無線)カイトとミズキ バード1で到着！」

○DASHバード1号コクピット

コバ「(無線/オフ)遅い！ 怪獣を代々木公園に追い込むぞ」
ミズキ「了解！ カイト隊員、ミサイルだと周辺に被害が出る。

ウイング・ブレードで攻撃」

カイト「了解！」

○富ヶ谷

バードから追われ、公園に入っていくゲロンガ。

○スタジオ

モニタに映る中継アナ。

中継アナ「怪獣はDASHによって代々木公園に追い込まれていく模様です！」

アナウンサー「判りました。気をつけて取材続けて下さい。上田さん、DASHの攻撃についてどう御覧になりますか？」

上田「まあここでDASHがとれる策はそれしかないでしょうが、怪獣による都市災害は二次的なものが多い。何が何でも怪獣を公園から出さない事が肝要ですな」

アナウンサー「佐橋さん、この怪獣がどうしてここから出現したとお考えですか？」

佐橋「私は、あの怪獣を以前――、未だ若い俳優だった頃に、遭遇した事があるかもしれない……」

アナウンサー「え……、それは……」

佐橋「しかし、大きさが全然違う……」

○奥多摩／トンネル前

廃坑となっているトンネル来ている撮影クルー。
佐橋、訝しみ顔で立っていた。

佐橋「――監督、どうしたんですか。何かトラブルでも」

スタッフ達、何やら騒然となっている。

肇「さっきね、セカンドの奈良丸がトンネルの中に下見に行
ったまま帰って来ないっていうんだ」

佐橋「それは大変だ……」

と、そこに自転車で行ってくる地元の巡查。

巡查「あんたたちか、勝手にトンネル入ったとか」

肇「どうも申し訳ありません」

巡查「ここは昔の坑道だ。普段は誰もいないんだよ」

と、トンネルから出てくる数人のスタッフ。

宇津見「どうした！ いなかったのか？」

チーフ「(首を振り)暗くてよく判らないんですが、なんか、奥
から獣の声みたいのが聞こえるんです」

弘子「まさか――ホントに怪獣がいるのかしら」

西郷「怪獣じゃなくて妖怪かもしれないな。ウシオニとかさ」

弘子「やっちゃん、不謹慎だわ」

佐橋「しかし放っておく訳にはいかないだろう。監督、僕も中
に入って探します」

肇「よし、照明さん、トンネルの中を照らしてくれないか」

照明チーフ「判りました」

宇津見「ならカメラも一応持っていこうか。(助手に)おい」
一同、入っていく。

□CM

○トンネル内

暗いトンネルを照明部が炊いたライトが照らします。
スタッフ達「(口々に)奈良丸ーッ！ 奈良丸ーッ！」

先頭に立ち、スコップや照明用の支柱を武器の様に持って進む佐橋、西郷。そして巡查と監督。

肇 「佐橋ちゃん、気をつけてくれ」

佐橋 「大丈夫です監督」

と——、トンネル奥より獣の咆哮が響く。

思わず佐橋の腕にすがりつく弘子。

佐橋 「ロコ、外に出ている」

弘子 「(さっと身を離し強がって) あたしだって、ここに何が
いるのか確かめたいわ」

西郷 「先輩！ 誰かいます！」

佐橋 「！」

か細い男の声が聞こえてくる。

佐橋 「照明さん！ 光を当てて下さい！」

照明部、必死にライトを引っ張ってくる。

カメラマンの宇津見、手持ちで撮影。

目を凝らす佐橋、やがて見えてくる、倒れている男。

佐橋 「あっ、いた！」

チーフ 「奈良丸！ 大丈夫か！」

奈良丸 「足が……」

駆け寄るスタッフと巡查。

巡查 「何があったんだね？」

奈良丸 「急に、何かでかい奴に襲われて……」

顔を見合わせるスタッフ。

肇 「足が折れてるらしい。早く病院に運ばないと」

チーフ 「よし運ぶぞ！」

と！ 再び獣の吐息が聞こえた。

佐橋 「静かに！——」

びくっとなるスタッフ達。

佐橋 「こっちに近づいてる」

宇津見 「(ファイナダを覗き) 照明部！ もっと光当ててくれ！」
照明が奥にまで光を届かせる。

と！ 突如浮かび上がる、体高5mのゲロンガ！

西郷 「ほっ、ほんとにいやがった！ ウシオニだっ！」

肇 「佐橋ちゃん！ 早くここから逃げてくれ！」

佐橋「監督は怪我人を早く！」

巡查「なっ、こ、こいつは一体……」

ゲロンガ、ずんずんと迫ってくるが、肇、チーフらはなかなか奈良丸を動かせないでいる。

弘子「佐橋さん逃げて……」

佐橋「ここで食い止めるしかない！」

佐橋、スコップでゲロンガに立ち向かう。

憤怒の雄叫びを上げるゲロンガ。

西郷、腰が引けていたが――

西郷「――きしょーっ！　こうなりや俺も！」

西郷、照明脚部で佐橋と共に立ち向かう。

腰が抜けていた巡查も立ち上がる。

巡查「（気合）くくくくくっ！　男、横山巡查！　民間人に

引けをとってなるものか！」

巡查、ゲロンガに向け引き金を引く。が、弾が出ず。

巡查「ん？　ああっ！　しまった！　弾を込めてなかった！

駄目なんだなあ、あたしゃこういう時……」

必死にフィルムを回す宇津見。

宇津見「本物だ！　本物の怪獣だ……」

▼宇津見が捉えるフレーム内

二人の俳優が、本物の怪獣と戦う姿。

が！　ゲロンガの動きは俊敏。レンズの存在に気づいた。

肇「！　宇津見さん……危ない！」

宇津見「ひっ……」

ゲロンガ、口蓋を大きく開き――、吐き出す炎。

宇津見「うわああああっ……」

放り出されるカメラ。フィルムケースが開き、飛び出したフィルムに炎が引火。

肇「宇津見さんこっちへ！　佐橋ちゃん……」

佐橋、ゲロンガの腕にはね飛ばされてしまう。

西郷「先輩……くっそそおとおお！」

西郷、闇雲に照明脚部を振り回しゲロンガに突進！

弘子「やっちゃん……やめて……」

西郷「うがあああっっ！」

西郷、ゲロンガの角の一本を折った！

西郷「どうだああっっ！」

ゲロンガ、激しく暴れ、天井にぶち当たる。

佐橋「！——急所だったみたいだな……」

西郷「やっ、やったんスカ？俺……」

ドドオオオオン！

ゲロンガ、坑道の壁、天井に激しくぶつかる。

と、地響きが始まる。

佐橋「！ トンネルが崩れるぞ！ 逃げろ！」

巡查「はっ、早く！」

佐橋、弘子の手を引き出口へ。西郷、巡查も続く。

崩れていくトンネル。そこに埋没していくゲロンガ。
振り向き、その顛末を見つめる佐橋——

○スタジオ

佐橋「——フィルムは全て燃えてしまい、その回の『アンバラ
ンス』は結局幻となってしまったのです」

上田、信じられないといった顔。

アナウンサー「え、ええと——、現場はどうなってますでしょう

か、中継を繋ぎます」

中継アナの声「あっ！ 危ない！」

佐橋「！」

○代々木公園

ゴオオオオッ！ ゲロンガが炎を吐く。

○DASHバード1号コクピット

ミズキ「わああっっっ！」

キャノピー一杯に広がる炎。

ミズキ、動転しながらも操縦桿を操作。

カイト「ミズキ隊員！」

ミズキ「——（必死に冷静さを取り戻す）判ってる！」

○代々木公園

ゲロンガの炎、DASHバード1号の機体を焦がす。
煙を上げる1号。

ヒジカタ「（オフ／無線）ミズキ、不時着しろ」

ミズキ「（オフ／無線／苦渋）了解……」

広場に不時着していく1号。

入れ代わりに攻撃を仕掛ける2号。

○2号コクピット

コバ「ようし、ここならミサイルを撃てる！ ショーン！」

ショーン「Okey-Dokey！」

ミサイル発射操作。

○代々木公園

ゲロンガに向けて放たれるミサイル。

全弾命中！ ゲロンガ、苦悶の咆哮。

□CM

○代々木公園／地上

不時着した1号から降り立つカイトとミズキ。

怒り狂ったゲロンガ、2号に向け、続けざまに炎を吐きかける。

カイト「まずい！ 公園から出てしまう！」

駆けだそうとするカイトに

ミズキ「カイト隊員！」

カイト「二手に分かれ、地上から攻撃しよう！」

ミズキ「——（頷き）判った！」

ミズキ、武装をチェックし、駆けだす。
カイト、反対側の広場に向かっていく。

○渋谷公園通り上

警官が野次馬を追い返している。

そこからやや離れた歩道に立ち、鬱蒼とした公園の木々越しに見えるゲロンガを見上げている男——

マスター「——俺はここにいるぞ……、ゲロンガ……」

○スタジオ

アナウンサー「（狼狽）えー、このスタジオのあるところに怪獣が迫ってきています。いつまで放送出来るか判りませんが、出来る限り放送を続けます」

逃げ出していく上田。

佐橋も退避させようと説得しているFD。だが佐橋は動かない。

佐橋「——怪獣が何故現れるのか——、ずっと考えてきました。怪獣が実際に現れる様になったのは、人間が怪獣の出現を望んだからではないか——、そういう可能性を私は否定する事が出来ないのです……」

アナウンサー「は？……あの、すいません、よく判らないんですが……」

カットバックで、DASHバード、マザーと交戦するゲロンガの映像。

佐橋「古来より、人間は怪物というものを数多く夢想してきました。ドラゴンがその代表でしょう。人は怪物を想像しないではいられなかった。人の力を超えた、強大な力と巨大な体を持つ怪物の姿——。それに人は強く憧れてきたのです」

○代々木公園／地上広場

走ってきたカイト、マックススパークを掲げ――

○変身シーケンス

カイト、ウルトラマンマックスへ。

○代々木公園

眩い光と共に現出するウルトラマンマックス。
その存在に気づき振り向くゲロンガ。
マックス、身構える。

○代々木公園／地上

ミズキ「マックス――」

○公園通り上

眩しそうにマックスの背を見上げるマスター。
マスター「……」

○代々木公園

マックス対ゲロンガの闘いが始まる。
ゲロンガの身のこなしは、40年前と同様に俊敏。
跳躍してマックスに噛みつきこうとする。
苦戦するマックス。

○スタジオ

揺れるスタジオ。慌ただしく動くスタッフ。
だが佐橋は、真剣に語り続けている。
佐橋「この日本では、スクリーンやテレビに、数多くの怪獣が

現れ、子どもたちの心にその姿を強く焼きつけてきました。いつしか怪獣は、単に作り物の存在ではなく、我々の想像の中で、現実化していった——」

○代々木公園

ゲロンガの巨体にのしかられるマックス。

ゲロンガ、咆哮し——、マックスの顔めがけ口蓋を開く。

マックス「(苦しむ)」

ゲロンガの喉の奥から沸き上がる炎——

○公園通り上

マスター「マックス！」

○代々木公園

マックス、逃れようともがく——

○フラッシュ／バーカウンター

マスター「あいつの角、一本折れてるでしょう。あれ、私が折ったんです——」

○代々木公園

マックス、渾身の力でゲロンガの顎を持ち——気合で押し上げた。

マクシウム・ソードで、角の一本を折った！

ゲロンガ、哀しそうな声を上げ、みるみると戦意を失い、身を丸めていく。

○代々木公園／地上

ミズキの側に、見上げながら近づいてくるヨシナガ博士。

ヨシナガ「――怪獣が、泣いている……」

ミズキ「えっ……」

○代々木公園

マックス、マックス・ギャラクシーを放とうとするが――

ゲロンガの哀れなる姿に、構えを解く。

○放送局／エントランス

走り出てくる佐橋――。

佐橋「――マックス――」

○代々木公園

マックス、ゲロンガを持ち上げ――、飛翔。

マックスの飛翔した軌跡が、虹の様に描かれる。

○公園通り上

マスター「……」

○スタジオ

アナウンサー「怪獣はウルトラマンマックスによって、奥多摩山中の地下深くに運ばれた模様です。東京の危機は去りました――」

○代々木公園

静けさが戻った公園――。

バード1の方へ歩くミズキのところに、カイトが走ってくる。

ミズキ、笑顔で迎える。

と、カイト、そこから離れたところを歩く人に目を止める。

カイト「(ほら)」

ミズキ「――」

ヨシナガ教授――、

佐橋――、

西郷――。

三方向から集まり、微笑みを交わし合う。

カイトとミズキは、眩しそうに三人を見つめる。

三人は、空にかかった虹を見上げた。

N 「怪獣が何故現れるのでしょうか。その答えは、一つでは

ないのかも、しれません――」

カイトとミズキも、虹を見上げ――

以下次回